慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	安南沱〓(ツウラン)の日本町
Sub Title	
Author	金, 永鍵(Kin, Eiken)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.2 (1940. 9) ,p.47(249)- 71(273)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安南沱灘（ツウラン）の日本町

金　永　鍵

一六一八年、交趾支那（今の安南）へ來たクリストフル・ボリ神父は、その傳道記の中で、「交趾支那の王は、幾度も、葡萄牙人達へ、沱灘の港の附近で最も肥沃な、そして豐饒な所の、國土を三里あるひは四里も與へて、支那人達や日本人達がなしたと同じく、そこへ、自分達の必要な凡ゆるものをひつくるめて、一の町を建てるやうにした」と云つてゐるので(註一)、第十七世紀の初めに沱灘に日本町の在つたことは大抵に知られてゐるが、その史料は極めて貧弱である。唯、あの有名な茶屋の繪卷きが有るので、その位置のみは割り合ひに知られてゐる(註二)。例へば、それに就いて、黑板勝美博士は次の如く云ふ「私共はツーランに參りまして、この圖により、日本人町の地點を調査しましたところ、現に今フランスの地方政廳がある地點、又立派なホテルのある區域が丁度日本人の占領して居つた日本人町に當るのでありまして、現在に於けるツーランの新市街の中心ともいふべき地點が昔の日本町に當るところであります。これによつてまた當時我が日本人がツーランに於て租界を作つてゐたところは最も地の利を得た區域であつたことが推測されます。併し今は此日本人町が前に申しましたやうに、すべて新市街となつてゐる

ので何等の遺跡を留めて居ません」と(註三)。以上は、ほゞ、當を得てゐる說といつて宜しい。私がこの一文を草する故は、新しい史料に照して、これをもつと叮寧に說明し、殊に、その位置を、出來うるなら、もつと正確に考察してみやうとする意圖に外ならない。或はそれが一つの推理に止るにしても。たゞし、例へ、今日、その遺跡を發掘してみたところで、先づ、何も見つからないだらうといふことは覺悟をせねばなるまい。それはこの日本町が同じ頃に於ける會舖のそれなどのやうに、瓦ぶきの建て物などが並んでゐたやうな相當なものでなく、草ぶきの小屋などしか並んでゐなかつた貧弱なものであつた上に、町そのものが間もなく衰微してしまふたゞらうと思へるからである。のみならず、第十八世紀の後葉には西山の亂に見舞はれ、第十九世紀の中葉には佛蘭西と西班牙との聯合艦隊の砲擊に見舞はれ、とても昔の形見などが殘つてゐやう筈がないのである(註四)。

この沱灘の日本町の位置を究めるために、皆に依つて引用される唯一の史料は、先きに揭げた、名古屋の情妙（名）寺に保たれてある、茶屋新六（郎）の交趾貿易の圖である。然し、これは、已に、多くの人々に依つて、その圖なり、研究なりが發表されてあるので、こゝには繰り返すまい(註五)。その沱灘と覺しき處には、ちやんと、「日本町、兩輪三丁餘」と記されてゐる。たゞ、こゝで問題にしやうとするのは、この日本町の南に在る、岩生成一敎授のいはゆる「港務署」と「其の後方に（ある）四本柱草葺の粗末な高い凉臺卽ち監視塔」とのことである(註六)。卽ち、私は後者の今日に於ける位置を究めることに依

つて、その北に在る前者の位置をもう少しはつきりさせやうと試みる積りである(註七)。

扨て、この「港務署」なるものに就いて、岩生成一教授は、一六三六年アブラハム・ダッケルがなした報告を引用して、それが沱灘の港に於ける提舉司が船を檢閲する所だと云つて居られる(註八)。この提舉司なる者の重な役目が海防の任に在つたことは、後で引用する他の旅行家達もひとしく證する所であり、安南の史料でも「大南會典」の兵部の條を見ると、その「監視塔」なる者の本當の目的がむしろ戰略の爲に在つたことが、ほゞ想像できる(註九)。

所が、この問題の茶屋家の朱印船が安南へ來たのは、早くて文祿年間から、遲くて寛永年間までゝあるから、廣南朝では、第一世の、先王と稱ばれた、太祖の、阮潢(一五五八—一六一三)と、第二世の、仕王と呼ばれた、熙宗の、阮福源(一六一四—一六三五)の治世のことである。それから、約一世紀の間は、黎朝の鄭氏との競り合ひは有つたが、割り合ひに、天下の泰平が打ち續いた。それで、第九世の睿宗の阮福淳(一七六六—一七七七)の治世に至る迄は、沱灘に在つた、港務署なり、監視塔なりの位置も、そう變つては居なかつたらう。然るに、一七七三年には、あの悲慘な西山の亂が起り、この西山の阮氏と、廣南の阮氏と、黎朝の鄭氏との三國誌劇の爭ひが、沱灘及びその附近を中心に、三十年の間も續いて、一八〇二年に、やつと、治まつたのである。この亂の爲に沱灘及びその附近もよほどひどい修羅の巷と化してゐたらしい。若し、例の監視塔なり、港務署なりの位置が變つたとすれば、かゝる際

ではなかつたらうかと疑ひたくなるのが普通の見方である。それにも拘らず、この位置は、そんな風に、變つてゐなかつたと、少し意外な想像ではあるけれども、及ぶ限り、辯明してみやうとするのが私の目論見である。

嘗て、私は「安南松本寺釣り鐘と泰德通寶」なる一文を草した時、一七七八年、西山の亂の際に、會舗へ來たことのある、チャップマン（Chapman）の旅行記を引用したことがある(註十)。その時、順化は黎朝の鄭氏が占めて居たが、沱灑や、會舗や、歸仁や、柴棍は凡て西山の阮氏の三人兄弟の據る所となつてゐて、それまで、富國島へ逃れてゐた廣南の阮氏は殆んど姿を消してゐた。その時、チャップマンは歸仁で西山の王に逢ひ、沱灑へ來て、會舗を訪れ、再び、順化へ戻つて、港としての沱灑が如何に素晴しい者であるかを讃へながらその旅行を畢るのである。この旅行記が始めて發表されたのは一八〇一年だといふが、それが發表されたといふ「亞細亞年報」（Asiatic annual Register）なる者を私は見てゐない。私が讀んだのは、一八〇九年に、佛蘭西語に譯された、「交趾支那旅行記」（Relation d'un Voyage à Cochinchine）である。これは、マルト・ブルン（Malte-Brun）が編纂して、巴里のF・ブキッソン（Buisson）書肆から出版した、「歷史地理旅行年表」（Annales des Voyages de la Géographie et de l'Histoire）第七卷の初めに掲載されてあるものである。その中には挿し繪が二枚あるが、こゝで問題にしやうとするの

は、その中の一つの「會舗の河の上の交趾船」(Batimens Cochinchinois sur la Rivière de Faifo) といふ圖である。これらの圖はタルデヰユ (Tardieu) の指し圖の下にマヰエ (Maillet) が刻版したものである。然し、實を云ふと、この挿し繪は共に原圖ではない。それらの原圖は、後でも引用するが、一八〇六年に發行されたJ・バロウの旅行記に掲載されてあるものである。この點、私も、P・ブウデ氏の說を信じたい。それをタルデヰユの指し圖の下に、マヰエに模寫させて、チャップマンや、J・バロウの旅行記などを佛蘭西に紹介した、マルト・ブルンが、後で、チャップマンのそれの譯本へ挿し入れたものである。故に、この譯本には、少くとも「會舗の河の上の交趾船」の圖に關する限り、滿足な說明が見當らないのである。然し、先きにも斷つて置いた通り、私は、一八〇一年に發表されたといふチャップマンの旅行記の原本を見てゐない。萬が一にでも、それに、この問題の圖が載つてゐたら何うする？　それでも、一八〇六年に、J・バロウが發表した圖を、一八〇一年に、卽ち、五年も前に、チャップマンが模寫させたのだと云へるだらうか？　卵が鷄を生む法はあるけれども、兒が親を生む則はないから。然も、一八〇一年に發表されたチャップマンの旅行記を見てゐない限り、私はそれにこの圖が載つてゐなかつたと、全くは保證することが出來ない。そして、載つてゐなかつた積りで、この一文を草し、たま〳〵、載つてゐた場合は、私は、改めて、この一文を草し直さなくてはならないだらう。反對に、載つてゐた積りで、この一文を草し、たま〳〵載つてゐなかつた場合でも、私は、更めて、この一文を

草し直さなければならないといふ必要はないだらう。たゞ、餘計な老婆心を出したものだとすれば、それまでの話しである。これが曲りくどくても、先づ、チャップマンの旅行記に照して、この「會舖の河の上の交趾船の圖」を說明してみやうとする所以である。いまこの圖を見ると、見馴れたやうな、一連の山脈を背景にした――それはあの名高い海雲關に續くものであらうか――河の入り口には、多くの船舶が帆を下してゐるが、その向つて右側の濱の上に在るのは、他ならぬ、茶屋の卷き物に描かれた監視塔なのである。四本の柱に支へられ、草ぶきの屋根で蔽はれた塔には、一つの梯子が懸けてある。そして、二人の番兵が海を視つめてゐる。その下に在る茅屋は、小いながら、例の港務署であらう。或る人はこの「會舖の河」といふのを、文字通り、會舖に在る河と思ふかも知れない(註十一)。勿論、會舖にもかゝる監視塔などが在り得ないこともないだらうから。然し、實際に、會舖の河を溯つてみた人なら、誰でも氣がついたことだらうが、その背景にこんな素晴しい山脈はみえない。のみならず、會舖の河も、可成り、廣いが、會舖そのものが海岸から遠く、何しろ、平原の上に在るので、その河が幾ら廣くても、一つの河に過ぎない。この圖の如く、入り口が三角洲のやうになつて、海に接したやうな觀は呈してゐない。そして、後で引用する、マカアトニヰ卿の旅行記などにも、この監視塔は、正に、海へ出入りする船を監視するため、沱瀑に在つたものだとは云ふけれども、河を上下する船を監視するため、會舖に在つたものだとは云つてゐない。而も、このチャップマンの旅行記を讀んで見ても、彼が會舖に着いたの

は八月十三日で、十五日から十八日までの間には、已に、そこを去つて居る筈である。從つて、會舗に關する記事は甚だ少く、二頁を合せて六十行の一枚に過ぎない。それかと云つて、先きにも注意して置いた通り、沱灘のことを相當に詳しく書いてゐながらも、その河の入り口の岸、むしろ、濱の上に在つた筈の監視塔なり港務署なりに就いては一言だに觸れてゐない。今、その旅行記から、こゝに、役立つべき部分を、極めて、忠實に拔萃してみやう。「翌、（一七七八年）七月二十六日の朝、われ〳〵は歸仁へ戻るべく出かけた。そこへは夕方に着いた、そして、二日後は沱灘へ帆を走らせた。……歸仁の北の二度のところには、プロ・カントンと稱ばれる島が在る。この島の北の三十あるひは四十分のところには、プロ・カムペラと呼ばれるもう一つの島が在る。この後の方の島には錨を下すに好い處がある。向ひ側の陸は河の入り口を成して、そこから船は會舗まで溯り、その支流は沱灘灣へ注ぐ。八月二日、われ〳〵はこの入り口へ錨を下した。……（その村は立派な建て物が有つたが、西山の亂に荒された。三四日後、廣南の鎮守のやうな者が、四艘の船を曳いて河を下りて來て、彼に逢ひ、會舗の近くに在る館へ歸つた。――筆者）十三日、われ〳〵は會舗まで河を溯り始めた。ときぐ、ある手續きをするため、止まつたりした。かく仕樣なしに、憩ふたある處には、一つの岩蔭があるが、その一部は河へ傾いて、われ〳〵を壓し潰しさうな恰好をしてゐた。それはすつかり河の岸へ出て、全く孤立した、小さい白い大理石の山であつた。われ〳〵は、岩の全身に、穴や裂け目があり、周圍にはそれから採つた大きい石

塊があるのを見た。近くには石切り工達の住む幾つかの小屋があつた。……（十五日、着いたばかりの彼の船アマゾン號で順化鎮守が逢ひたいと知つた――筆者）。アマゾン號を沱灘灣に殘して、八月十八日、ベキアアド氏と共にその付き添ひの船へ乘つて出かけた。（そして、十二月十八日、沱灘灣を發つまで、しば〳〵順化へも往來するが、船舶の根據地はいつも沱灘へ置いて、その港としての條件を調べてゐる――筆者）」これだけで、例の圖を說明しやうとすると、問題の河が會舖の河だとも解釋できるし、「沱灘の河」だとも解釋できる。然し私はこの「會舖の河」が、實は「沱灘の河」だと云ふ。後でも引用するが、J・キテキエの旅行記には、チャップマンのそれと、以上に引用した部分に於て、不思議に一致してゐるのである。而も、J・キテキエの旅行記には、ちやんと、沱灘の河が會舖の河の名で呼ばれてゐる。件の「小さい白い大理石の山」は先きに話した普陀山のことであらう。然らば、何が故に、沱灘の河の名が會舖の河となつてゐるのだらうか？　卽ち、それは、チャップマンやJ・バロウの云ふ如く、會舖の河の「支流が沱灘灣へ注ぐ」からであり、次に引用するブウゲンヴキユの云ふ如く、沱灘から會舖へ溯りうる「會舖の運河」の意味でゝある。然る時、このチャップマンの圖と茶屋の圖とには、少くとも、監視塔の位置に關する限り、僞らざる共通の點を發見できるだらう。

それから、約十數年後のことである。一七九一―一七九三年、支那からの歸りに、沱灘へ寄つた、マカアトニキ（Macartney）大使は、この港務署の「監視塔」なる者に就いて、次の如く述べてゐる（註十二）。

卽ち、先きに揭げた、達磨座禪岩の北に在る、とろん岩島の東北の角を廻つて、港に入ると、その南方へ沱灘の市に導く、河の入り口がある。「その街と港とを隔つ岬の地點には、一つの塔が見えるが、それはたゞ四本の大きい杭と差し違ひにした木片に依つて支へられてある一枚の床板からなるものである。その塔は輕い屋根で蔽はれてある。一人の番兵が梯子に依つてその床板へ登る、とそこから番兵は、港の入り口から、北方に在る凡ゆる船舶や、(とろん岩島が達磨座禪岩の在る陸へ續く狹く淺い)地峽から、南方に在る凡ての船舶を、容易に見うるのである。その塔の傍には事務所が在つて、そこでは河を溯らうと欲する大船や小船などが檢査を受くるため碇泊せねばならないのである。」この一文を初めに揭げた、茶屋新六(郎)の交趾貿易圖、それよりも、チャップマンの會舗の河の上の交趾船の圖と對照してみる時、まるで、それらの圖を懇に說明してゐるやうではないか? 而も、沱灘にかゝる監視塔のあるのは、海へ出入する船舶を監視するためだと、その理由までも明言してゐる。

ところが、このマカアトニヰ卿と一緒に沱灘へ來たのがヂョン・バロウ(John Barrow)である。その「一七九二と一七九三年とに於ける交趾支那への旅」(A Voyage to Cochinchina in the years 1792 and 17.3)は、倫敦のT・カデル(Cadel)とW・デヴィス(Davis)書肆で、一八〇六年に、出版された。この旅行記の第十章には、矢張り、チャップマンの旅行記に揭載されたのと同じ、「會舗河の上の交趾船」(Cochinchina Shipping on the River Faifo)が揭載されてある。これはアレクサンダア(Alexander)

の畫に依つて、メドランド（Medland）が版を刻し、色彩を施したものである。この旅行記も、翌一八〇七年、マルト・ブルンに依つて、「交趾支那への旅」（Voyage à la Cochinchine）として譯され、巴里の、F・ブキッソン書肆から、發行されてゐるが、その題の下の註を見ると、同じく、タルデュユに依つて「會舗の河の上の交趾船」の圖が掲載されてあると云ふ。然し、私の見た本にはこの圖が取れて無かつた。そして、この旅行記の原本には、沱灞の河に就いて、「沱灞灣へ注ぐ會舗河の支流」となつてゐる。これをマルト・ブルンが、「沱灞灣に入り口の有る會舗の河」と譯してゐるのは正しく無いが、兎に角、これで、問題の會舗の河の圖が、實は、沱灞の河のそれであることが明かになつたわけである。さて、ヂョン・バロウが沱灞へ來た時は、黎朝の鄭氏や、廣南の阮氏は、已に、亡び、西山の阮氏も終りに近づいた時であつた。それでも、先きに觸れて置いた通り、問題の港務署の監視塔の位置が、昔と變つてゐなかつたことは知れやう。次に他の史料に依つて、何故に、沱灞の河が會舗の河と呼ばれたかを調べ以つて、チャップマンやバロウの圖に示された監視塔が茶屋の圖のそれに他ならないことを證しやう。それと同時に、如何に、チャップマンやバロウの圖の監視塔の位置が變遷して、今日に至つたかを調べ、以て昔の日本町の位置を想定してみやう。

一八〇二年には、西山の亂も終りを告げた。その西山朝に代つたのが、今の安南の阮朝である。そし

て、世祖と呼ばれた、阮福暎は、一八一三年に沱灘へ奠海臺を築いた。然らば、この奠海臺は何處に築かれたのだらうか？　名前こそ、奠海臺であれ、初めは小規模のもので、沱灘の海を監視するために築かれたものだから、例の監視塔なり、港務署なりの在つた跡ではないかと思ふ。その證據には、この臺が築かれてからといふもの、何れの旅行記にしろ、もう、例の監視塔なり、港務署なりに就いて語る者はない。而も、數世紀を通して、沱灘の海を監視するため、築かれて、而も、變らなかつた程、重要な塔なり署なりが理由も無しに、無くなるとか、變るとかはしなかつたらう(註十三)。「大南一統志」に「本朝嘉隆十二年（一八一三年）築臺在沱灘汎稍近海濱」とあるのは私の推理を裏書きする者と思ふ(註十四)。これに就いては、後でも再言しやうが、「大南寔錄」に依ると、翌一八一四年に、この臺は修築されたけれども、位置はそのまゝであつた(註十五)。

この奠海臺が築かれて丁度十年目卽ち一八二二年に沱灘へ來たのがヂョウヂ・フヰンレヰソン（George Finlayson）である(註十六)。九月十五日、沱灘へ着いて、約十日間、港のことをいろ〳〵と調べてゐるが、九月二十日、陸へ上つて、そこの樣子を描いてゐる。先づ、沱灘の村は船の止る所から三哩もあるが、河の入り口の左岸には、「ほゞ四角の小さい堡壘」が在つて、「砂の壁と溝とで圍まれてゐる」。その反對側には、「余程遠くの所に」幾つかの他の堡壘が見えた。この河の左岸といふのはその上流から下流へ向つての左岸だらう。そして、この岸の上に在るのが奠海臺だらう。勿論、沱灘には他の堡壘も有つた。

然し、河の入り口に、最も近かつたのは奠海臺である。「稍近海濱」に在つたこの臺が、その反對側の、「よほど遠くの所に」、在つたかの如く見えた筈は無い。この臺が「砂の壁と溝とで圍まれてゐる」「ほゞ四角の小さい堡壘」であつたと云ふのをみると、次に引用する「大南寔錄」の中に記されてゐる通り、何が故に、翌年、この臺の位置を、少し南へ遷して、築きなほしたかゞ分る。卽ち、初めに建てた奠海臺は、名のみは臺であるが、チャップマンやバロウの旅行記に掲載された沱灑の圖に見ゆる、河の入り口に在つた、監視塔の跡へ、その代りに、少し、新たな、多分、佛蘭西人達の技術を眞似て築いたのではあるが(註十七)、何しろ「砂の壁と溝とで圍まれてゐる」貧弱なもので「以致不能堅固兼逼近海岸海水浸嚙日就坍圮曾已列樁築石而波濤洶湧人力難施」なものであつた。

然し、翌一八二三年には、沱灑の奠海臺が海濱へ近過ぎてゐるので、稍南に遷し修築させた。これに就いては、「大南寔錄」から阮朝の第二世の明命帝の勅諭を引けばその事情がよく分るだらう(註十八)。癸未明命四年（一八二三年）「移築廣南奠海臺命神策左營副都統制阮文智兵部參知阮科明董其役諭之曰嘉隆年初營築此臺事出伊始董理者又不得人以致不能堅固兼逼近海岸海水侵嚙日就坍圮曾已列樁築石而波濤洶湧人力難施朕以此臺乃爲固海疆壯國勢而設也豈可憚勞惜帑置之不問乎令令人相度形勢可移於稍南五十丈餘高廣之地營築之及臺成賞文智銀五十兩紗二匹緞一匹紀錄二次科明銀三十兩紗二匹紀錄一次遣信直衛兵駐防奠海臺」そして、一八三四年に奠海臺の名を奠海城に直して今日に至つてゐる(註十九)。「大南一統志」に

依れば、この奠海城は一八四一年にも修築されたとみえる(註二十)。「同慶地輿志略」の廣南の編には奠海城の名を示す地圖が三つぐらいあつて、位置、何れも一定してゐない。然し奠海城の廢墟は沱灑の市の中央の濱に近い基地に殘つてゐるので、今日も、その位置を知るのは易い(註二十一)。即ち、奠海臺の原の位置は稍その北の濱に近い岬へ在つたのだ。

この奠海臺が位置を直した翌一八二四—一八二五年に沱灑へ來たのがP・ド・ブウゲンヴィユ(de Bougainville)男である(註二十二)。即ち沱灑の村は「海邊の上の會舗の運河の入り口の右岸の上に在るが、そこには乾いた濠や堤といつしよに、佛蘭西人の技師達に依つて築かれた堡壘が建つてゐる」のだつた。これに依つて沱灑の河が會舗の河と呼ばるゝに至つたのは、「會舗の運河」の意であることが察せらるゝだらう。たゞし、多分、奠海臺のことであらう所の、この堡壘が佛蘭西人の技師達に依つて築かれたとあるのは、前にも觸れて置いた通り、信じ難い說である。

而して、この奠海臺が城になつて修築された後、一八四五年に、沱灑へ來たのはジュヰル・ヰテヰエ(Juler Itier)である。即ち、一八四五年五月三十日、彼は、當時、順化で虐げられてゐた宣教師の解放を求むべく、沱灑に至り、六月十二日、そこを去るが、その中には沱灑の港に極めて詳しい描寫をなしてゐる(註二十三)。不幸にして、その描寫が詳しいから、必ずしも、明かだといふのではないが、幸にして、その旅行記のこの部分はチャップマンの旅行記のその部分と不思議な類似の點がある。これが、J・ヰ

テキエの沱灘に關する敍述を究め、以て、チャップマンの旅行記の折りに引いた文が沱灘を指すことを明にして、その河は會舖の河に他ならず、その圖は沱灘の港に他ならないことを明にしたいのである。六月三日、J・キテキエは沱灘の村の見物に出かけるが、その日記に曰く「われ〳〵は一緒に嘉隆の治世の下に、佛蘭西人の士官達に依て、歐羅巴式に建てられた沱灘の小さい堡壘を訪れた」と。これが奠海城のことゝ思へたが、その言ふ所は、先きのブウゲンヴィユの場合と同じく、いきなり信じ難い。そこを過ぎると、象の飼育場があり、そこを過ぎると、墓地があり、そこを過ぎると村の市場があり、そこを過ぎると大官の役所であるお寺があるといふから、沱灘の土人の市街は昔から、今のアンリ・パルマンテキエ博物館の近くに在つたらしい。この土人の市街が船の止る所から三哩もあると云ふG・フキンレキソンの言を參照しても分る。六月七日、彼は普陀山を見るべく、小船に乘り、沱灘の河を溯りながら曰ふ「われ〳〵が會安（會舖）の河の入り口に現れるや、韓（沱灘）の衛戍部隊の赤い兜をつけた兵士達の間には最も激しい動搖が見えた」と。こゝに「會安（會舖）の河」といふのを rivière de Noi-An (Fai-Fo) とあるのは rivière de Hoi-An (Fai-Fo) とあるべきで、印刷のとき、HをNに誤植したのだらう。これから、彼が河を溯り、「岩の足が河に浸つて幾つかの洞穴の拱門を成してゐる岩だらけの一群」の「大理石の岩」、卽ち普陀山を訪れる曲折は全くチャップマンの記事と一致する。それから、六月十二日、沱灘を後へ、港を離れながら、彼は思ひ出ぶかく叫ぶのである。「これは正しく沱灘の灣な

のだ、水平線に於ける大きい寺の大理石の岩、ほゞ中央のところには會舗の河の入り口、そして、もつと北には沱灘の村、手前の場面には觀測島（卽ち、茶山――筆者）がある」と。

一八五八―一八五九年、沱灘の奠海城は佛蘭西と西班牙との聯合艦隊の砲擊に依り、見る影も哀れなほど、潰されてしまつた(註二十四)。その時の沱灘の港の地圖にはこの城が西堡（fort de l'Ouest）となつてゐる。そして今日まで、ずつと拋り棄てたまゝになつてゐる。例へば、それからの數十年後に、沱灘へ來たデュキトレキ・ド・レン（Dutreil de Rhins）などは次の如く語つてゐる(註二十五)。「遂に、われ〳〵は砂だらけの淺い兩岸の間へ入つた。入り口の兩側の數百米に在つて、一八五九年に爆擊された二つの小さい堡壘は半分は放棄せられて城壁の煉瓦が濠に一ぱいである。」故に、この事件の後に書れた旅行記などには、沱灘の奠海城に關する限り、大して、役に立つやうなことは言つてゐない。その廢墟は病院に使用されてゐる。

今日、沱灘へ行つて見ると市の中央の小高い處に、病院に利用されてゐる奠海城の跡が有る。その稍北の濱近く在る、黑板勝美博士の所謂「現に今フランスの政廳がある地點、又立派なホテルのある區域」はむしろ、古い奠海臺、卽ちバロウやチャップマンや、引いては茶屋の圖の監視塔の在つた位置である。故に日本町は、尙その稍北の岬近く在る鐵道の曲る土堤の附近に在つた筈である。卽ち、「現在に於けるツーランの新市街の中心ともいふべき地點が昔の日本町に當る」のではなく、その北の濱に沿ふて、こ

の町は一つの埠頭を形成してゐた。茶屋の圖をよく見るとそれが分る。日本町の手前に在る「獵師濱、万市町」といふ市場は市街ではなく、海で漁つて來た魚や、船で運んで來た菜などを、小船の着く濱の上に並べて、日傘などをさして賣り、その小船の上で宿つたりなどしてゐた、今日、安南の隨所に見る露天の市場であつた。これも茶屋の圖をよく見れば分る。この獵師濱、万市町の在つた、岬の砂濱は非常に廣い。この安南の海岸に獨特な砂濱は常に隆起してゐるやうである。茶山も島であつたといふのが陸へ續き普陀山も島であつたといふのが陸へ續いてゐるが、その陸といふのは、實は白い砂濱に過ぎない。

先きに引用した、J・キテヰエの「支那への旅の日記」第三卷の初めには、一八四五年に描いた、「交趾支那のノン・ナイの堡壘の景」といふ圖が掲げてある。卽ち沱灘の茶山に在つた一つの堡壘のスケッチである。これに就いて、H・コッセラ（Cosserat）氏は、「交趾支那の遺跡の最初の寫眞、ノン・ナヰの堡壘」（La première photographie d'un site cochinchicis : Le fort de Non-Nay）と題して、次の如く云ふ(註二十六)。卽ち、一八五八―一八五九年、佛蘭西と西班牙との聯合艦隊が沱灘を攻めるまでは、この港の史料と爲るやうな圖はむしろ珍しかつた。有つたとしても、史料と爲るやうな値打ちはない。と云ふのは、見たことも無い、下手な繪描きが、旅行した人の、漠然とした說明に依つて、無茶なものを作り上げるから

である、と。成るほど、次に引く、ブウデ氏の著書などを見ると、沱灘を描いた古い數枚の圖に就いては、斯る批判を下すのも無理は無いとも思へた。然し、少くとも、チャップマンやバロウの旅行記に載せられた「會舗の河の上の交趾船」の圖に關する限り、この言は無理で有ると思ふ。果して、コッセラ氏はこの圖を沱灘のそれと信じてゐながら、かゝる言葉をいつたか何うかは知らないけれども。兎に角、この圖はキテッエのそれより數倍も史料としての値打ちがある。その港の描寫は正確である。殊に、茶屋の圖と比較する時、例の監視塔の前に並ぶ日本町が目に見えるやうである。上にも少し觸れて置いた通りポヲル・ブゥデ（Paul Boudet）氏は、そのアンドレ・マッソン（Andre Masson）氏との共著に係る「佛領印度支那歴史圖譜」（Iconographie historique de l'Indochine française）の中に、問題の「會舗の河の上の交趾船」の圖を收めてゐる（註二十七）。この圖を描いたウキリアム・アレクサンダアはマカァトニキに隨いて沱灘へ來たのだつたと云ふ。然らば、この圖はその港を見たことも無い、下手な繪描きが、旅行した人の、漠然とした說明に依つて、無茶なものを作り上げた者とは思へない。P・ブゥデ氏とA・マッソン氏とはこの圖の解說として、マルト・ブルンの譯から、「沱灘灣に入り口のある會舗の河……云々」といふ、曲りなりの一句を引用してゐる。そして見出しには、沱灘灣の條の下に、「沱灘の附近の圖」としての會舗の河としてゐる。そして、解說の題に「沱灘の會舗との景色」とあるのを見ると、この圖を會舗とみたか、少くとも、沱灘の附近に在つて、そこに入り口の有る、會舗の河の中流ぐらいにみて

ゐて、沱灘の港そのものを表すものとは見てゐなかつたらしい。他の人で、この圖を引用した人がゐるかも知れないが、未だ、沱灘灣の史料として引用されてゐると云ふことは、薄識のせいか、見たこともなければ、聞いたこともない。

（註一）クリストフル・ボリ（Christofle Borri）著、「交趾支那王國に於ける、耶蘇會神父達の新傳道記」（Relation de la nouvelle mission des Pères de la Compagnie de Jesus, au royaume de la Cochinchine）。A・ド・ラ・クロア（de la Croix）譯。リキル、P・ド・ラシュ（de Rache）書肆、一六三一年。第一編、第八章、第九五頁。

（註二）諸圖版の解說を一纏めに。

（註三）黑板勝美、「南洋に於ける日本關係史料遺蹟に就きて」（啓明會第二十七回講演集）。東京、啓明會、昭和三年。第一五―一六頁。

（註四）この一文を草するに際し、辻善之助博士の「增訂海外交通史話」や、岩生成一教授の「南洋に於ける日本關係史料調査報告書」などが手許に無くて參考できなかつたことは殘念に思ふ。

（註五）この圖は、辻善之助博士が「南洋の日本人町」（大町桂月主宰「學生」、東京、富山房、大正四年一月、第六卷第一號、六四―六七頁）に掲載されてゐるが、或は「增訂海外交通史話」にも轉載されてあるかも知れない。次に、川島元治郎氏の「德川初期の海外貿易家」（東京、仁友社、大正六年）や、その改版である「朱印船貿易史」（京都、內外出版株式會社、大正十年）にも載つてゐる。而して、ノエル・ペリ氏の「第十六及十七世紀に於ける印度支那と日本との關係に就いての小論」（Essais sur les relations du Japon avec l'Indochine aux XVIe et XVIIe siècles）（「佛蘭西極東學院報」（Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient）、河內、一九二三年、第二十三卷）の終りにも掲げられてあるが、その實物の模寫は佛蘭西極東學院の中に保存されてある。

（註六）岩生成一、「南洋日本町の盛衰」（一）、「臺北帝國大學文政學部史學科研究年報」第二輯、昭和十年六月。第五五（三九）頁。

（註七）却說ながら、こゝで少しつけ加へたいのは、この茶屋の圖に依ると、沱灘の南に在つて、廻り一里も餘るといふ「達磨座禪

岩」のことである。これは天竺德兵衞の物語りに出てくる「達磨尊者誕生の地」に他ならない。然し、斯る名稱は何れもこの山の本來の名稱ではない。と云つて、强ち、根據のない名稱でもないのである。然らば、如何なる緣起に依つて、達磨なる名稱がこの山のそれに附會されたのであらうか？　それを知るために、われ〳〵はこの山の中にある「普陀山靈中佛」の碑を聯想しなくてはならない。然し、先きに揭げた黑板勝美博士の講演の中で、この佛を「阿彌陀の木像」とするのは誤りで、翌年「史學雜誌」第四十編第一號に發表された、「安南普陀山靈中佛の碑について」の中で述べられた通り、「印の結び方は阿彌陀如來のやうであるが、普陀山といふところから見れば恐らく觀音像であらう」とするのが穩當な說である。恐らく、この碑を建てた人達も佛を菩薩の意に混同して使ふたのだらう。卽ち、この普陀山は支那の浙江の舟山列島の中に在る普陀山に倣ふてつけた名に他ならない。その原因は安南の普陀山があだかも海中に聳えてゐるやうで、規模は小さいながら、その奇しき姿が、支那のそれに類するを思へたからである。例へば許琰の「重修南海普陀山志」の初めに揭げられた支那の普陀山の圖など見ると、この山の一隅に茶山といふのが在るが、これが沱灘の茶山に當るものだらう。茶屋の圖には「とろん岩島」となつてゐる。而して、支那の普陀山の一隅に達磨峯といふのがあるのを見ると、達磨の名が觀音のそれに代つて安南の普陀山の靈中佛に結びつけられたのに不思議はない。支那の普陀山は第十世紀の初め、日本の僧慧鍔に依つて開創されたゞけ、江戸時代の初めに安南へ來てゐた船員達にも良く知られてゐたことだらう。支那の五臺山で觀音の像を持して歸る海の上でその靈驗に遭ひこの普陀山を開創した。安南の普陀山も南海へ出る船員達に取つては早くから航海の標として知られてゐる。それで、朱印船などに乘つて來た日本人達がこれを普陀山と間違へてか故意にか呼んだのを支那人や安南人の佛徒も同意して、例の碑を建てたのではないのだらうか。あだかも、森本右近太夫などが柬埔寨のアンコヲル・ワットを印度の祇園精舍と間違へたやうに。その例には、當時、今の安南へ來た日本人達はそこを交趾と呼んだ。本來の交趾なら、むしろ、東京の地方であつた筈である。それを眞似て葡萄牙人達は交趾支那といふ國の名を作り上げ、印度の交趾と區別させて用ゆるやうになつた。安南の普陀山の名が日本支那安南の佛徒達に依つて建てられた例の靈中佛の碑に初めて現はれるのも、敢て不思議にすることはない。勿論、支那の普陀山は觀音菩薩の靈驗の場として普く知られてゐる印度のポタラカ山を眞似たので

ある。然し安南のそれが後者でなく、前者に依るものであることは先きに述べた通りである。この觀世音の德を頌するため、普陀の名をつけた山や寺などは東岸の各地に散在するので、安南にも斯る處の在るのは極めて自然なことであるが、この普陀山の名をA・サレ（Sallet）が文字通りに譯さうとしたのは凡そ意義のないことである。以上は私が「震檀學報」第十卷にも「安南普陀山名考」として發表した意見を些か修正して具體的にしたものである。

（註八）岩生成一「南洋日本町の盛衰」（一）。第四四（二八）—四五（二九）、及五五（三九）頁。

（註九）「欽定大南會典事例」、卷百七十二、兵部（汎堡）、左直、廣南省。

（註十）「史學」第十七卷一號、昭和十三年八月。八〇—八一、八三頁。

（註十一）普通に會舗の河と云へば福澤へ流れる本流のことである。その入り口は大占海口（汎）といつて、C・E・ブウヰボウ（Bouillevaux）神父の所謂 cua Cham であるが、船の錨を投ずべき所としてはさう適してゐなかつたらしく、その上流に會舗といふ一つの津みたいなのが出來たわけである。反對に、cua Han と謂はれた沱灘は海港として最も適して居り、その河は、早くから、會舗へ溯る運河の用をなしてゐた。先づ會舗が大阪なら沱灘は神戸で順化は京都か奈良みたいな立ち場にある。ブウヰボウ神父の言については、「安南と柬埔寨」（L'Annam et le Cambodge）、巴里、V・パルメ（Palmé）書肆、一八七四年、を參考にせられたい。

（註十二）ヂョウヂ・スタウントン（George Staunton）著「マカアトニヰ卿に依づて一七九一、一七九二そして一七九三になされた支那と韃靼の內地への旅行」（Voyage dans l'intérieur de la Chine et de la Tartarie fait dans les années 1791, 1792 et 1793 par Lord Macartney）。J・カステラ（Castéra）譯。一七九八年、巴里。第一卷、第四三二—四四三頁。

（註十三）これに就いて、私は「古順化同友會報」（Bulletin des Amis du Vieux Hue）の主宰でもあり、今の安南の歷史に就いての權威でもある、レヲナァル・カデヰエル（Léonard Cadière）神父に敎へを乞ふたら、次の如き親切な返事を寄してくれた。參考のため、こゝに、その全文を譯載したい。「一九四〇年、安南、闘トゥンより。貴下よ。貴下が中部安南の歷史に興味を持たれ

るのは仕合せなことです、多大なる興味を以て御研究を拜讀いたしませう。不幸にして、沱灘の古い保壘に關しては資料が有りません。たゞ知つてゐるのはボウモン（Beaumont）中尉が「印度支那雜誌」（Revue Indochinoise）、一九〇四、一九〇五年に、そしてサレ博士が「古順化同友會誌」、一九二八年、に言つてゐることだけです。殊に、後者には安南側の防禦陣の諸要素の位置を完全に定められる地圖、第一七八頁、があります。何れにせよ、沱灘の古い堡壘の位置を定めるには戰略上の考察がわれ〳〵を助けてくれるでせう。きつと堡壘を設けるために撰ばれたゞらう所は、何時もながら、地方で最も高い所だつたのです。而して、今日でも、佛蘭西の兵營が設けられてあるのは、正しく、この最も高い地點で、ほゞ市の中央に位し、八乃至十米の河を支配する所であります。そしてこれらの兵營は古い安南の堡壘をとり圍んでゐますが、（これは――西班牙佛蘭西聯合艦隊に依る（筆者）――征討の資料に出てくる西壘であつて）、その壁や濠はなほ兩側に見受けられます。而して、一七九一――一七九三年に、マカアトニヤの語る塔の在つたのは、殆んど間違ひなく、そこであつた筈です、と云ふのは砂の地峽や河の向ふの、沖の海や、沱灘の灣を最もよく監視ができるのはそこだからであります、（上に擧げた地圖を御覽ください）。行政の官廳なり商人の店舗なりの在つた所は、この最も高い所の周圍で、何方かと云へば、今日の如く、河に向いてゐた所であります。沱灘の安南の堡壘が嘉隆帝に事へた佛蘭西の士官達に依つて建てられたと云ふのは正しくありません。私が「古順化同友會誌」、一九二一年、第二八三――二八八頁の中で言つてゐることを御覽ください。もつと充實した資料を與へられないのは殘念なことです。若しセェデス（Coedès）氏さへも同意なさるなら、御研究のためには「古順化同友會誌」の紙面を割愛いたしませう。貴下よ、わが尊敬の意を御嘉納下さりたまへ。L・カデキエル。」こゝに於て、神父に對しては心からの感謝と尊敬の意を表する次第である。

（註十四）「大南一統志」卷十五、廣南、三五頁、奠海城。これに就いて、「大南寔錄」正編、一紀、四六卷、六頁、世祖高皇帝寔錄、癸酉嘉隆十二年（一八一三年）の條には次の如く云ふ。「築廣南奠海臺（臺在沱灘海口）命阮文誠往董其役工竣留兵五百按守之」と。

（註十五）「大南寔錄」正編、一紀、四八卷、七――八頁、世祖高皇帝寔錄、甲戌嘉隆十三年（一八一四年）、「命都統制宋福樑發廣南民五百人修築奠海臺」。

（註十六）ヂョウヂ・フキンレキソン著「暹羅と交趾支那の都順化への差遣」（Mission to Siam and Hue, capital of Cochin-china）、倫敦、J・ムレキ（Murray）書肆、一八二六年、第八章。九月二十日の日記。

（註十七）こんな貧弱な堡壘を佛蘭西人の士官達の指導の下に建てられたと云ふのは誤りである。これは、嘉隆帝に事へた彼等が西貢の城を築いたのに因る想像だらうけれども、實を云ふと順化のそれすら彼等の手に成つたのではない。然し、後でも引くが、一八二五―一八二五年のブウゲンヴキュや一八四三―一八四六年のJ・キテキエや、嘉隆帝に事へたシェニョウ（Chaigneau）の子さへそう言ふのである。彼等は一八二三年に、沱灑の奠海臺がその位置を變へたのも知らなかつたのだらう。これについては先きに掲げた手紙の中に言つてゐる如く、L・カデキエル神父が「古順化同友會誌」一九二一年に已に、その是非を分明してゐる。

（註十八）「大南寔錄」正編二紀十九―二十一頁、聖祖仁皇帝寔錄。この普請のために「役民五千人月給錢米人各月給錢三緡米一方毎五十人置頭目一月給錢三緡五陌米一方五百人置管領一月給錢五緡米一方」であつた。「大南一統志」卷十五廣南三五頁奠海城に「明命四年（一八二三年）移今所、甃築」とあるのがそのことである。

（註十九）「大南寔錄」正編二紀百二十三卷二七頁聖祖仁皇帝寔錄、甲午明命十五年（一八三四年）「改廣南奠海臺名爲城帝以臺設有城池雄鎭海疆非他礮臺者比特賜名焉尋令改給城銅圖記。」「大南一統志」卷十五、廣南三五頁、奠海臺明命「十五年（一八三四）改爲城。」

（註二十）「大南一統志」卷十五廣南三五頁奠海城「紹治七年（一八四一年）改砌。」

（註二十一）これが、今日、沱灑に見る奠海城で、それが西班牙佛蘭西聯合艦隊に砲擊さるゝ前の姿は「大南寔錄」正編二紀十九―二十一頁聖祖仁皇帝寔錄癸未明命四年（一八二三年）の條に依ると「奠海臺高十二尺郭外高七尺臺內建駐防軍舍火藥庫」とあり、「大南一統志」卷十五廣南三五頁に依れば、奠海城は「距和榮縣東十二里在沱灑汎之左週一百三十九丈高一丈二尺濠深七尺門三旗臺一砲臺三十所」とある。

（註二十二）私はこの旅行記を直接には讀んでゐない。「古順化同友會誌」第四年四號（一九一七年十―十二月）に、同年六月二十七

日の例會で、ギヨン（Guillon）博士が發表した「沱灑へのブウゲンヴヰユの旅」（Voyage de Bougainville à Tourane）と題する一文が載つてゐる。私はその中に引用されてゐる句節を再び引用してゐるわけなのでこの旅行記に就いてはそれ以上のことを知らないのを遺憾に思ふ。

（註二十三）ジュヰル・ヰテヰエ著「一八四三、一八四四、一八四五、一八四六年に於ける支那への旅行日記」（Journal d'un Voyage en Chine en 1843, 1844, 1845, 1846）。巴里、ドウヴアンとフヲンテエヌ（Dauvin & Fontaine）書肆、一八五三年。第三卷。

（註二十四）ミシエル・ヅク・シエニョウ（Michel Đức Chaigneau）著、「（交趾支那）順化の思ひ出」（Souvenirs de Hué-Cochinchine-）、巴里、帝國印刷所、一八六七年の終りの方の沱灑に關する部分を讀んでみると、この港のことは、一八五八—一八五九年の遠征に從軍した將校達に依つて、詳しく而して正しく描かれてゐると書いてあるので、それらの著書の中には西疆の歴史に關する記事も有るかも知れないが、不幸にして、一つも讀んでゐない。「古順化同友會誌」一九二八年に出した、サレ博士の「沱灑の陷落」（La Prise de Tourane）の終りに掲げられてある參考書さへ手に入らなかつた。アンリ・コルデヰエ（Henri Cordier）氏の「印度支那書誌」（Bibliothéca Indosinica）第三卷、印度支那、地理、沱灑の條に示された諸書も、或る者は見つからなかつたが、その中でもA・ジラアル（Girard）著「交趾支那と沱灑とに關する研究」（Etudes sus Tourane et la Cochinchine）、巴里、J・コレアァル（Corréard）書肆、一八五九年だけは是非みたいものだつた。

（註二十五）これは、一八七八年四月十七日、地理學會（Société de Géographie）の例會で發表した「安南の海岸と順化の地方」（La côte d'Annam et la région de Hué）の中で言つてゐることであるが、この報告は「地理學會報」（Bulletin de la S. de G.）第六輯、第十六卷（一八七八年、七—十二月）に收められてゐる。そして、私が引用した部分と殆ど同じ文句は、同じくデュヰトレヰ・ド・レン著「安南の王國と安南人」（Le royaume d'Annam et les Annamites）、巴里、プロン（Plon）書肆、一八七九年、第二章の中にも出てくる。

（註二十六）「古順化同友會誌」第十四卷三―四號一八五―一九二頁一九二七年七―十二月。

（註二十七）佛領印度支那總督府圖書及文書課の事業として巴里のG・ファン・ヲエスト（Van Oest）書肆から出版したもの。第一五―一七頁及び圖版九の十二。

（追記）本文には別に關係が無いけれども序でながら一言だけ付け加へて置きたい。昭和九年八月、松本信廣先生は、「史學」第十三卷二號の中で、「安南發見の和鏡」といふものを紹介されてゐる。これは、一九三三年、「古順化同友會誌」第二十年四號に發表された、J・H・ペキッソノウ（Peyssonnaux）氏の「蒐集家の手帳」（Carnet d'un collectionneur）と題する一文を紹介されたものである。その中には「印度支那の古い日本町から出て來たり、安南、柬埔寨、交趾支那、東京で見つかつたりした日本の品物」を紹介する目的で、先づ「七つの銅鏡」を擧げてゐるが、それと同時に「印度支那の古い日本町」のことも述べられてゐる。この一文が發表されてから、已に七年になり、紹介されて已に六年になるにも拘らず、何うして、今日まで、氣が付かなかつたか知らないけれども、遲れ馳せながら一言だけ付け加へて置きたい。先づ、東京に就いては、一一四八年、馬來、暹羅、緬甸人達の貿易港であつた、庸雲屯、卽ち萬寧へ初めて日本人が來て居たのだとし、次に、一六三七―一七〇〇年に和蘭陀の商館が建つて居た興安の庸安、卽ち庸客（外國人達の町）にも日本人達が町を成して居たとし、終りに、一八九二年、例のGデュヤムテヤエ（Dumoutier）氏が「日本の佛蘭西雜誌」（Revue française du Japon）の中で述べてゐる次の言葉を引用して居る。曰く「尙ほ、河內の市場では、百姓達が齎して來た古い品物の中に、（第十六―十七世紀）時代の日本の靑銅や黃銅品などが、しば〳〵見當る。土地の工業の諸製品と混同されて、これらは歐羅巴人達に依り安南または支那のものと考へられて居る。そして、この蒐集の失ひ兒は、僞りの貼り札の下に、好古家の玻璃棚を豐かにさせる。斯る種類のもので最も共通のものは銅製の噴水器や、切つて造つた火鉢や、鷄や、宗敎的な瓶などである」と。これらが何故に當ての成らない說かは已に昭和二年八月、「雲屯と日本人」（「歷史學研究」第七卷八號）の中で、昭和十四年九月、「佛領印度支那東京興安に於ける舖客に就いて」（「史學」第十八卷一號）の中で、そして昭和十

五年　月「鎖國後に於ける印度支那と日本との關係」(「史學研究」第十二卷二號)の中で批判して置いたので、こゝには繰り返すまい。その他、ペキッソノウ氏は沱灑の日本町に就いて、茶屋の圖を引用したり、柬埔寨のアンコヮル・ワットの石柱に記された文を引用したりして居るけれども、失禮ながら、この問題の一文だけは極めて幼稚な域を免れてゐないので、敢て、是非などを尋ねやうとはしない。實を云ふと、氏がまだ此の世に生きて居て、順化の啓定博物館の主任をして居た時、先きに掲げた「七つの和鏡」の拓本を予に寄し、その銘を讀んでくれと頼まれたことがある。その時、予は「天下一藤原重義(?)」と讀んでやつたのであつて、氏の解した如く「天下一藤原重表」などゝは夢にも敎へてやらなかつた筈である。何れにせよ、斯く、印度支那で發見された昔の日本關係の遺物は、その遺跡と共に、例へば圖譜のやうな形式の下に一纏めにして研究をしたら良いと思ふ。西貢のブランシヤアル・ド・ラ・ブロッス博物館にも日本の美術品が蒐集されてあるが、これらは、マレレ(Malleret)氏が「支那部の蒐集目錄」の中に收められてゐる。河内のルヰ・フヰノ博物館に保存されてある日本の美術品も早くその目錄が世に出れば幸ひなことゝ思ふ。(完)

一九四〇年四月五日、河内。

佛蘭西極東學院圖書室の一隅で